

書評

ピーター・クオン
「アメリカにおける中国人不法就労者」

松原真沙子

Peter Kwong, *Forbidden Workers:
Illegal Chinese Immigrants and American Labor.*
The New Press, 1997, 273 pp.

Masako MATSUBARA

10数年前になるが、コネティカット州に住んだことがある。贅沢な話だが、東部の上品な街並みや清潔そのものの郊外住宅に感激するのは最初のうちだけで、慣れてくると何とはなしに物足りなさを感じ、心寂しくなってくる。そんな時に足が向くのがニューヨークのチャイナタウンだった。物売りが声をはりあげ、車のクラクションが鳴り響き、雑然としたアジア的汚さを溢れさせているこの町に不思議な懐かしさを覚えたりもした。しかしそんなことはこちらの勝手なセンチメントで、チャイナタウンの住人は金儲けに血眼なのである。レストランであれ、食料品店であれ、たとえ言葉が通じたとしても個人的な雑談など入り込むすきもなく、そこでの生活はよそ者にはうかがい知ることにはできない。ならば一層いったいこの町はいかなることになっているのかと好奇心をかき立てられる。そんな欲求に応えてくれるのがピーター・クオンの著書である。

1987年に⁽¹⁾*The New China Town* を出版してから丁度10年後の1997年、ピーター・クオンは*The Forbidden Workers: Illegal Chinese Immigrants and American Labor*を著し、再び中国人労働者の問題をとり上げて我々の注意を喚起した。この10年間で状況は大きく変化している。取り上げられる事例は主として、彼が長年住んだニューヨークのチャイナタウンの労働者だが、問題はもはやチャイナタウンに固有のことではなくなっている。今や全世界を巻き込むかたちで起こっている中国人の“地下人口移動”問題抜きには変化の核心は語れないからである。問題の根は中国の開放政策が生み出した急速な経済発展にあるとピーター・クオンは指摘する。まず中国の内陸部から沿岸都市へと、そして北から南へと豊かさを求めて中国内部で大きな人口移動が起こったが、この移動は中国内部に止まることなく沿岸都市からさらに外に向かって流れ出しているのである。このような現象は過去においても“黄禍”として何度か世界を脅かしたことがある。しかし今日の中国からの人口流出は、その規模においても、また犯罪的性格においても過去に例を見ない。勿論日本もこの問題と無縁ではいら

れない。

前著*The New China Town*は出版されるとほどなく「ロスアンゼルス・タイムズ」が書評欄の第一面でとり上げ、「ニューヨーク・タイムズ」も著者への長文のインタビュー記事を載せるなど、膨大な移民研究の蓄積があるアメリカでも異色の研究として注目された。⁽²⁾本書も「フィラデルフィア・インクワイヤラー」、「ウォール・ストリート・ジャーナル」、「アジア・ウィーク」などで必読の書としてとり上げられている。⁽³⁾

1979年米中の国交が回復し、“中国大陸の中国人”に対する2万人の移民枠が設けられて以来、全米各地にチャイナタウンができ、その規模も年々大きくなっている。2万人の中にはヴェトナムやカンボジアからの中国系移民や難民は含まれていないが、彼らの多くがチャイナタウンに吸収されていくことを考えるとチャイナタウンの増大は納得がいく。

アメリカが不景気のどん底にあった80年代半ばも、ニューヨーク・チャイナタウンの通りは買い物をする人々でごったがえし、活気があったことを記憶している。移民してきた中国人は、受け入れ国で寄り集まる傾向があり、彼らが寄り集まる割合は他の移民集団よりはるかに大きいという。ニューヨークのチャイナタウンも、ここがアメリカとはにわかには信じがたいほど“中国人”の街である。しかしよそ者でもレストランや中華食料品店や貴金属店の客であるかぎりにおいては十分に歓迎される。店員の話す英語は流暢なものから、理解不能なものまでさまざま、彼らがいかなる理由でアメリカにやって来て、どんな暮らしをしているのかは知る由もない。買い物や観光でこの街を訪れる者には、裏通りの足元から下、ビルの地下にある薄暗い「スウェット・ショップ苦汗工場」で働く縫製工の姿を窓越しにチラッと見て、彼らが置かれている状況を想像してみるくらいがせいぜいである。ピーター・クォンは、よそ者には混沌として無秩序に見えるが、また一方では人間の生の魅力を発散させているこの町の中を詳細に描き出し、我々の好奇心を大いに満足させてもくれる。

ピーター・クォンは1943年中国大陸に生まれたが、その後台湾を経てアメリカに移住している。ニューヨークのチャイナタウンに長く住んだ経験があり、この町をすみずみまで知り尽くしていることは勿論、ここで働く労働者やコミュニティー運動の指導者とも親しく交わってきた。ニューヨークの*The Village Voice*の記者としてこの町の取材をした経験ももつ。またコロンビア大学で政治学の博士号を取得しているピーター・クォンは、長い間ニューヨークのチャイナタウンを研究のフィールドにもしてきた。恐らく彼ほどこの町をよく知る研究者はいないだろう。

チャイナタウンを実際に歩いてみても感じることだが、確かに中国人は寄り集まって生活していて、外部の者の目には、そうであるからこそうまくやっけていけるのだと映る。また中国人は他のマイノリティーとはちがってアメリカ政府の援助なしに成功していると信じられている。中国人は底辺から出発することを厭わず、出世するために相互に助け合う。つまり

中国系アメリカ人はマイノリティーの模範とみられてきたのだ。しかしピーター・クォンには、こうした見方は現実を単純化しすぎていると映る。実際には中国人ははっきりと異なる二つの階層に分かれている。1980年代の時点ですでに30%の中国人は高収入の専門職について、チャイナタウンを出て、「^{アップ・タウン}山の手」の住人になっている。このグループにはアメリカ生まれの中国人が多いが、一部の^{ニュー・カマー}高学歴の新移民もこのカテゴリーに入っている。しかし大部分の^{ニュー・カマー}新移民はチャイナタウンに住み、英語を話せず、低賃金で縫製工や、ウェイター、皿洗いといった将来性のない仕事についている。身内や同郷人との間の相互扶助でうまくいっているように見えるが、実際には中国人の移民の大部分は成功していない。“金持ち”になる日を夢見て、故郷を後にアメリカにやってはきたものの、英語も話せず、技術もない新入りを待ちうけているのは経済的苦境である。ピーター・クォンが前著*The New China Town*で問題にしたのは、多くの中国人が中国人に雇われて、アメリカの労働法によって守られることもなく、いわゆる「^{アンダーグラウンド・エコノミー}地下経済」のもとで働いていることであった。以来10年ピーター・クォンは中国人移民問題を追いつけてきたが、状況は流動的で新たな問題が次々と浮上してきている。

*Forbidden Workers*では冒頭、1993年6月6日、ロング・アイランドのロッカウェイ・ビーチで起こった「ゴールデン・ヴェンチャー号事件」が語られる。このホンデュラス籍の貨物船ゴールデン・ヴェンチャー号の“積荷”は密入国を決行した286人の中国人であった。密入国者をボートで“陸揚げ”する手引きをするはずのコンタクト先との連絡がとれぬまま、船はロッカウェイ・ビーチに向かって突き進み、座礁した。乗船していた中国人たちは、マンハッタンのビルの明かりが彼方に望めるところまで来ていることを知ると、雨のなか、まだ冷たい6月の海に飛び込み自力で陸を目指したが、沿岸警備隊に発見されることとなった。10人が命を落としたこの無謀な行為は、TVカメラに逐一とらえられて、全世界に流された。密入国斡旋業者（^{スネーク・ヘッド}蛇頭）に前払いした数千ドル（無事アメリカに到着した場合には総額3万ドルを支払う契約になっていたが、前払いの数千ドルは、たいていが親戚中からかき集めた借金である）はもとより、劣悪な船内環境の中で耐え忍んだ4ヶ月の月日が全くの無に帰した瞬間であった。ゴールデン・ヴェンチャー号でアメリカへの密入国を試みた者のうちの大部分は中国福建省出身の農民であることが判明した。

この事件より数年前、アメリカの中国人社会の変化に気づいたピーター・クォンは、パスポートを持たぬ中国人労働者の聞き取り調査を開始していた。その数は数百人にのぼった。密入国労働者の聞き取り調査は、いくつもの中国語方言に通じているピーター・クォンが得意とするところである。彼の語学の才能が、アメリカにおけるこの分野の研究で他の追随を許さぬ成果を上げうる所以であろう。しかしなによりも移民局の調査委員や「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」の目を恐れながらも、密入国労働者が精一杯時間を割いてピーター・クォンのインタビューに応じ

ているのは、彼の人柄と姿勢が、社会的に何の権利もなく身を隠して暮らしている労働者に心を開かせるのであろう。確かにピーター・クォンからは自己の研究の成果を上げるためにインタビューを利用するといった搾取的なところは感じられない。密入国労働者が、斡旋業者と彼らを雇う雇い主から十分すぎるほど搾取されていることをピーター・クォンはよく承知している。また彼には長年にわたるニューヨーク・チャイナタウンでの活動をとおして得た連邦及び州警察、新聞記者、ソーシャル・ワーカー、移民局の役人、弁護士、議員秘書といった人々との間に緊密なコンタクトがある。彼らを通じて集めた情報はおそらく膨大な量になるだろう。

ピーター・クォンはチャイナタウンのほんの少しの変化も見逃さない。1980年代に入ってから福建人が目立ち始めたことにもいち早く気づいていた。やがて福建人の数は、それまでチャイナタウンのマジョリティーであった広東人をしのぐほどになっていった。この変化は比較的短い期間に起こっている。

「ゴールデン・ヴェンチャー号事件」の後ピーター・クォンはただちに中国での現地調査を開始している。先にも述べたように、*The Village Voice*の記者を長年つとめた経験から、彼はアメリカにやってくる労働者一人ひとりに、顔をもった人間として関心を示すが、政治学者として、密航者を生み出す原因をマクロな視野から考察することも怠らない。その恐怖のイメージで今や知らぬ者のない「蛇頭」^{スネーク・ヘッド}とはいかなる組織なのか、ピーター・クォンはまずその成り立ちを解き明かしてくれる。現代の“人間密輸”は、1986年のアメリカの移民改正法（Immigration Reform and Control Act）に始まる。この改正には人権条項がある。1982年1月1日以前からアメリカに不法滞在していた人々には、その事実を証明するものがあれば滞在許可を与えるというものである。この条項は、すでに密入国していた福建人にとっては勿論のこと、中国大陸にいる人々にとってもチャンスであった。1988年の11月までにアメリカに入り、申請書類を提出しさえすれば合法的滞在者になれるのである。チャイナタウンには500ドルから600ドル出せば、日付をごまかした雇用証明書や納税証明書を作ってくれる会社はいくらでもあった。こういった会社に、書類を手に入れようとする中国人が殺到した。これを仕切ったのが台湾系の犯罪シンジケートだった。この組織はそれまで麻薬の密輸で稼いでいたが、突然目の前に別のビジネス・チャンスが出現したのである。すでにアメリカで合法的滞在許可を得ていた中国人、なかでも福建人は1988年のデッドラインまでに中国大陸の親戚をアメリカに呼び寄せようとやっきになった。台湾系犯罪シンジケートは直ちに福州で人を雇い、現地の密出国ネットワーク作りあげた。この現地の仲介人は「蛇尾」^{スネーク・テール}と呼ばれる。密航費用の額、支払い方法、密航ルートを決め、さらに密航を希望する者一人一人の徹底的な身元調査をし、その資料をシンジケートに渡して費用の取りはぐれがないようにするのが「蛇尾」^{スネーク・テール}の仕事である。シンジケートはチャイナタウンで営業をしていた

小規模な旅行代理店を配下におさめ、密航ネットワークを全世界に広げ、国際的なビジネスに仕上げた。ある密航者は中国からアメリカへ次のようなルートで入っている。中国からビルマ国境までバスで行き、そこからタイまではジャングルの中を歩き、バンコックで「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」に1,700ドルを払って船に乗り、シンガポール、モーリシアスを経てアフリカのケニアに上陸した。そこでさらに六ヶ月待つて再び船に乗り、アメリカに向かった。これは「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」のネットワークを示すほんの一例である。⁽⁴⁾当然のことながら密航希望者が増えるに従い、証明書にかかる費用も500～600ドルから2,000～3,000ドルと高騰していった。

日本円にして3百万円から4百万円もの費用がかかり、しかも法的な保護は全くなく、失敗すれば強制送還どころか命さえも落としかねない密航に、なぜ中国人は駆り立てられるのか。ピーター・クォンは福建省福州での観察結果を次のように述べている。福州では、アメリカで“うまくやった”者たちの例を見せつけられる。“成功者”は一時帰国すると、親のために豪邸を建て、最新式家電製品を持ちこみ、親戚に金をばら撒く。市の役人も彼らのすることにことごとく感銘を受け、彼らを丁重に扱う。こういったことは周囲の羨望を掻き立てずにはおかない。かくして老人と子供を除いて、男も女も出国熱にとりつかれるのである。中国にぐずぐずと留まっている者は無能力だとみなされる。

出国熱が特に福州人に顕著なのはなぜか。この疑問にもピーター・クォンは福州の歴史を簡潔に示して応えている。17世紀半ば、漢民族の明朝が満州族の清朝に倒されたときに、満州族の支配を嫌って福州から多くの住民が台湾に逃れた。福州に残った住民は、その後の清朝の厳しい監視にもかかわらず海外との関係をもち続けた。背後を険しい山に囲まれ、眼前に広がる海に出て行く以外に開かれた道のない福州の人間にとって、そもそも出国はそれ程特別のことではなかった。また福州人は海岸で海賊との取引をして生き延びてきた知恵から、天性の商人といわれる広東人さえも舌を巻くほど金儲けに長けている。福州はアヘン戦争後に開港された中国の五港のうちの一つでもあり、従って早くから外国人との接触を経験している。

しかし手段を選ばずたどり着いたアメリカで待っているのは、現代版“^{スエーデン}苦力”ともいうべき生活である。英語を話せず、使えるような技術もない密入国労働者に斡旋される仕事は、1日10時間、週6日の労働で月給600ドルの皿洗いの仕事がせいぜいである。工事現場の仕事は週給40ドルが相場である。女性の場合には介護や子守りの仕事もあるが、賃金は似たりよったりである。アメリカに到着するとすぐに「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」への支払いに追われるので、仕事の選り好みはしてられない。密入国が成功したら、7日以内に前払い分を差し引いた残りの全額を、福州あるいはアメリカにいる親戚が「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」に支払わねばならない。密入国者は、親戚からの借金に通常3パーセントの利息をつけて、3年以内に返済する。返済額は年1万ドル、月額にして約800ドルである。普通に働いていたのではとても返せる額ではない。した

がって密入国労働者は、日曜は勿論のこと早朝、深夜の労働も厭わない。一族の中で出国したい者が増え過ぎると、親戚だけでは支えられなくなる。そこで「蛇頭」^{スネーク・ヘッド}の高利の金を借りるものが出てくる。この高利の金に手を出すと、奴隷同然の生活を強いられることになる。24時間監視つきで働かされ、手元に残る金はゼロである。

現代版“苦力”^{ケウリ}で注意しなければならないのは、密入国労働者の仕事の場所が、かつてのようにチャイナタウンの中に限られているわけではなく、またチャイナタウンの中国人職業斡旋業者を通して労働者を雇う雇い主も、必ずしも中国人とは限らないことである。仕事の場所は、ニュー・ジャージー、コネティカット、メインなど東海岸一帯に広がっている。こうした状況の変化が、密入国労働者の実態をますます把握しにくくしている。今や福州人労働者を雇うのは、“ドミノピザ”のオーダーと同じくらい簡単だとまでいわれている。当然子供の数も増えていて、チャイナタウン地域の小学校では福州人の子供がマジョリティーになりつつある。密入国労働者の住環境も正に現代版“苦力”^{ケウリ}である。窓のない一部屋のアパートに20人が二段ベッドで暮らす。バス・ルームは一つだけ、自分が占有できるスペースはベッド一つ分である。このベッドを自分が仕事に出ている間又貸しする者さえいる。このようなアパートが、もともとはヒスパニック系の居住地区であったところに次々と出現している。

先に海外から中国に一時帰国するものたちが誇示する“成功”が出国熱を掻き立てると述べたが、実態はどうなのか。ピーター・クォンは、NBCから請け負ったドキュメンタリー番組制作のクルーと共に、密航者を多く出している福建省福州と浙江省温州の村を訪れ、密航者を生み出す背景について更に踏み込んだ考察を行っている。そこに見えてくるのは、“豊かになれるものから豊かになれ”という鄧小平の開放政策が生み出した歪みである。毛沢東は都市と農村の間に社会、文化、教育上の格差が生まれること、特に都市に豊かなエリート層が生まれることを恐れた。毛沢東と鄧小平・劉少奇の路線闘争については、いずれ歴史によって判断が下されるだろうが、熱い期待をもって迎えられた鄧小平の開放政策の結果置き去りにされた人々の状態は、1949年前の中国を思い起こさずにはいられないほどの悲惨さであるとピーター・クォンは述べている。中国政府の白書も、仕事を求めて中国国内をさまよう“盲流”と呼ばれる人々が約6千万人いると認めている。“盲流”の中にはボロをまとい、裸足でうろつく10代の少年、少女も混じっている。目の周囲にとまる蠅を追い払う気力も無く、うつろな目をして座り込んでいる少年、少女の姿は悲惨そのものである。

中国の近年の繁栄から見捨てられた人々が出てくるのは、社会主義市場経済の競争原理の当然の結果ともいえる。生産の自由が与えられると、農民は穀物生産を捨てて、競って市場での商品価値がより高い野菜や果物の生産を始めた。一人が成功すると、我も我もと同じ作物の生産に飛びつき、結果として価格破壊を招き、農民が自らの首をしめてしまう結果を招いた。製造業に転向した農民にも運はなかった。本書では靴の製造の例が紹介されている。

物が不足していた時代には農村で製造された品質が悪く、ファッション性のない靴でもいくらでも売れた。しかしここに都市の大資本及び外国資本（台湾と香港）が入ってくるのは時間の問題であった。外部資本に農村の土着産業はとうてい太刀打ちできない。こういった現象があらゆるところで起こっているため、中国国内での農業や製造業に見切りをつけ、海外に活路を見出そうとする人々はますます増えていくことになる。

ピーター・クォンは、ここで重要な指摘をしている。見逃してはならないのは、密航は外の世界に出て行きたいという若者の個人的な願望などではなく、ファミリー・プロジェクトになっていることである。一族の中から知的にも体力的にも優れた有望な若者が選ばれて出国する。2年間で無事「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」からの借金を払いを終わると、一族の中の次の若者の密航に必要な費用を稼ぎ出す。ここで二人になるとそれぞれがさらに呼び寄せをする。5～6年で4人になる。一族の人数が増えるほど、次の呼び寄せは容易になる。福州出身者に多いイク・アウトの中華料理店を運良く開店できれば、この呼び寄せのチェーンは急速に拡大する。次の世代の誕生がほしくなると、女性が呼び寄せられて子供を産む。

福州人とはいっても、密航者の中には福州市内の人間は少なく、ほとんどは市外の農村部の出身である。都市とはちがって農村部では宗族の共同体がまだ機能しており、一族の絆もなくなっていない。しかし、密航のチェーンを継続させているのは、もはや一族の文化的、道徳的な伝統からくる助け合いの精神ではなく、そこに働くのは経済的合理主義であるとピーター・クォンは指摘する。密航者に課される条件は二つだけである。支払いを確実にすることと、秘密の厳守である。村人は外の世界のように「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」を犯罪組織とは認識していない。密航が成功すると「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」を招いて宴席を設けたりもする。「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」が使う口コミは計画的、組織的で、外の世界に無知な村人を味方に引き込むのはわけのないことである。地方警察が密航を見て見ぬ振りをしているのは周知のことである。

1991年から1994年の間に毎年25,000人の福州出身の密航者がアメリカに入国したといわれる。総計で100,000人として、一人当たりの費用が30,000ドルとすると、ざっと30億ドルのビジネスである。しかし福州人の共同体の中での金集めにも限りがあり、このビジネスにかけりが見え始めると、「^{スネーク・ヘッド}蛇頭」の借金取り立ては過酷になっていく。また1日8時間働いて40ドル稼げた縫製工は、1日12時間働いても30ドルしか稼げなくなり、搾取もひどくなる一方である。いかに働き者で頑張りやの福州人でも、悪環境のもとでの長時間労働で身体をこわす者が出てくるし、事故も少なくない。密入国労働者が最も恐れるのは、身体を壊して働けなくなることである。働けないことは即死を意味する。ある者は出口なしの状態に追い込まれ、犯罪に手を染める。チャイナタウンはもはやかつてのような安全な場所ではなくなっている。

チャイナタウンへの密航者の増加は、奴隷的な労働者を増やすばかりだとピーター・クォ

ンは憂慮する。ゴールデン・ヴェンチャー号の実際の持ち主で、福青幫（ギャング）の「蛇頭」の親分といわれる郭隆棋がFBIに逮捕されたが、これで密航者が大幅に減ることは期待できないだろう。またアメリカの政治が、しばしば入国管理の邪魔をするとピーター・クォンは苦言を呈する。先に述べたように1986年には、人道的立場から一定の条件をつけて密航者に法的地位を与える措置をした。またブッシュ大統領は、1989年の天安門事件の際に、行政命令で何千人もの中国人学生を受け入れ、さらに中国政府の「一人っ子政策」を理由にした政治亡命も認めた。大統領行政命令では、少なくとも80,000人の密航者に、合法的地位を申請する権利を与えたといわれる。これでは密航しても大丈夫だと知らせているようなものである。1993年に逮捕された密航者1,500人のうちのほとんどが政治亡命を求め、中国に強制送還されたものは一人もいない。

労働者の組織力が落ちているために、不法労働者を、法定最低賃金よりはるかに安く雇い入れる素地がアメリカ社会にある。不法労働者の存在がアメリカの賃金を引き下げ、労働条件を悪くしていることは間違いない。日本では密航者や不法滞在者は、いくら滞在期間が長くても、正規の滞在資格を取得することはできないが、日本の時給は高く、滞在資格をもつ外国人や日本人との間の賃金格差はほとんどない。⁽⁵⁾ アメリカでは1986年の人権措置と同時に、不法滞在者とわかっていて雇った雇用主に対する罰則も定められた。この条項が功を奏したのは最初のうちだけで、密航者の流入に歯止めはかけられなかった。

密航者は、農村で食いつめて中国内を流れ歩いている“盲流”とは異なる。密航資金を調達できる資力があり、教育レベルは高くはないが、それなりの才覚のある人々である。彼らが奴隷貿易を思い起こさせるような状況下にあえて身を置くことを阻止するには、中国政府の協力が是非とも必要であるとピーター・クォンはいう。現在中国の過剰労働力は2億6000万人と推定されている。農村からはみ出した膨大な余剰労働力の受け皿が中国国内で育たないかぎり、密航の流れが止まるとは思われない。⁽⁶⁾

現在アメリカ国内には500万人の不法滞在者がいるといわれる。そのうちの60パーセントはメキシコと中南米出身のヒスパニック系である。ヒスパニック系の多くは清掃業に従事しているが、1980年、正当な扱いを要求してヒスパニック系清掃労働者が行ったキャンペーンをピーター・クォンは高く評価している。このヒスパニック系労働者の闘争から10年後になるが、1990年にニューヨーク・チャイナタウンの「苦汗工場」で起こった縫製工の闘いの例が紹介されている。密入国労働者の弱みにつけこんで、あの手この手で賃金を支払おうとしない経営者を相手に、縫製工が団結して6年の歳月をかけて、当然の権利である賃金を勝ち取った。とことんまで追い詰められて、ついに密入国労働者が団結し、身の危険を承知で証言をし、闘ったこのケースは、多くのことを示唆しているとピーター・クォンは見る。⁽⁷⁾ 中国からの密出国を止めることが先決であるのは勿論だが、このケースは密入国労働者にも人間らし

く生きる権利があること、その権利は、彼ら自身が勇気をもって声を上げることによつてのみ獲得できることを示している。確かに密入国労働者自身を除いては「蛇頭」や「苦汗工場」の非人間的な手口を直に知る者はいないのである。

2000年6月18日イギリスのドーヴァーでまたもや世界を震撼させる事件が起こった。ベルギーのジブラッグを出発した冷凍車が、ドーヴァー海峡をフェリーで渡ってイギリスに入ったところで税関に止められた。トマト輸送をしているはずのコンテナの中で発見されたのは、58人の中国人男女の死体だった。ヨーロッパでは珍しいこの日の猛暑が、想像するだけに恐ろしい死を招いたのだ。後に判明したところによると、彼らは福州—北京—モスクワ—チェコ—ベルギー—ドーヴァーというルートを経て、イギリスへの密入国を企てたのである。この他にも、インドからアフリカを経てイギリスに入るルートも判明している。⁽⁸⁾「水は低きへ流れる」という言葉どおり、余剰労働力は人手が不足しているところへ向かう。アメリカ、ヨーロッパだけでなく、アジアでも400万人前後が同じアジアの外国で働いている。そのうちの半数は不法就労者であるといわれる。シンガポールの建設産業はタイ人労働者を、台湾のコンピュータ産業はフィリピン人を、韓国の電気産業もフィリピン人を、マレーシアのゴム園はインドネシア人を、群馬県の中小企業工場は日系ブラジル人をそれぞれ必要としているのである。⁽⁹⁾

人々が国境を越えて地球規模で移動していく時代に入っていることは明らかである。日本でも死者でも出ないかぎり、密航はニュースにもならないほど頻発している。ピーター・クォンは、密航者の苦境を理解し、同情の気持ちを隠さない。しかし密航を厳しく取り締まることに反対しているわけではない。他国の主権を侵す密入国という行為は許されないことはいうまでもないが、事態は、密航者に奴隷的な労働を強いる「蛇頭」のような犯罪シンジケートを、一刻も早く締め出さなければならないところまできているのだ。しかしアメリカは、かつて彼自身がそうであったように、夢の実現を求めてやって来る人々を受け入れ続けるべきだとピーター・クォンは主張する。夢はそれぞれに異なろう。ある者はよりよい賃金を、ある者はより快適な生活を、ある者は政治的自由を、そしてある者は法の保護を求めてアメリカにやってくる。アメリカには、彼らを受け入れるだけのキャパシティーがあるはずだとピーター・クォンはいう。これまでのアメリカ移民の歴史が示してきたことだが、最初には民族集団の中で生活をする新移民も、やがてはより大きなアメリカの労働市場で競争できる力をつけて、外の世界に出ていく。そしてまた次の新移民がやってくる。しかし「蛇頭」の手引きで密入国してくる労働者は、将来への展望がない隔離された生活環境で生きることを余儀なくされている。ピーター・クォンは二重労働市場と固定的な底辺階層化の問題を、同胞である中国人労働者が置かれている状況を根気よく観察しつつ問い続けている。

日本も早晚外国人労働者を受け入れなければならなくなるだろう。社会的な差別や隔離を避けて、外国人と職場を共有する知恵を我々は持ち合わせているだろうか。大いに心配される⁽¹⁰⁾ところである。

注

- (1) Peter Kwong, *The New China Town* (New York: Farrar, Straus & Giroux, Inc., 1987) 同書は「チャイナタウン・イン・ニューヨーク：現代アメリカと移民コミュニティ」として1990年、筑摩書房から日本語訳が出ている（訳者：芳賀健一他）
- (2) 前掲日本語訳書「訳者あとがき」pp. 235-236
- (3) *Forbidden Workers: Illegal Chinese Immigrants and American Labor* 裏表紙 *A Village Voice*, Favorite Book of the Year に掲載されているものからの転記。
- (4) 莫邦富はその著書「蛇頭」^{スネーク・ヘッド}（新潮文庫、1998年、pp.13-14 & pp.72-86）で次のような密航ルートの例をあげている。香港経由でタイに入り、20日間待機の後、飛行機でオランダに飛び、オランダから船で中米のパナマを経てベリーズに入り、夜中に国境の川を渡ってメキシコに到着。そこからはトラックでアメリカを目指して北上し、闇夜に国境を破ってアメリカに入るといふものである。いくつもの中継地で手引きをするのは、マフィアのメンバーではなく、彼ら自身が中国からの密航者の場合が多く、手っ取り早い金儲けの方法として連絡、手引きなどを請け負っている。彼らが請け負うのはある地点から次の地点までの区間分担である。巨大な多国籍企業のような組織構造をもつ暗黒社会のように思われがちだが、「蛇頭」^{スネーク・ヘッド}は世界的規模の地下組織の指令で動いているわけではない。ただし密航の成功率を上げ、成功報酬の支払いを確実にするために犯罪シンジケートと手を組むケースが多くなっている。
- (5) 莫邦富、前掲書、p. 322
- (6) 莫邦富、前掲書、p. 268
- (7) 莫邦富、前掲書、pp. 180-186 密航者を多く出している温州や福州出身者は、面子を重んじる傾向が強く、海外での成功話は多分に誇張して語るが、失敗についてはダメな人間のレッテルを貼られるの恐れて口をつぐむのが常である。密航労働者が立ち上がったこのケースは、彼らが置かれた苦境が、すでに死ぬか生きるかのぎりぎりのところまできていたと考えるべきであろう。
- (8) *Newsweek*, July 3, 2000, pp.10-14
- (9) *Newsweek*, October 17, 1994, pp.10-15
- (10) この点に関して宮島喬は「外国人労働者迎え入れの論理—先進社会のジレンマのなかで」（明石書店、1989）でかなり悲観的な見方を述べている。 pp. 56-60参照